たのしい悪意

松村颯太

　善意や優しさなんていうものは、その人の人間性が強く現れるような気持ちだと思う。しかしそれ以上にその人の根っこの部分となっている気持ちは悪意だと思う。なぜなら善意は思いやりや優しさなどの上に成り立っているが、悪意はそれによって自分が相手に対してどういう影響を与えるかを考えずに発せられる、むき出しの感情だと思うからだ。そんな根源的な気持である悪意について最近思ったことがある。それが悪意は悪意でもその人の根っこの感情をふくんでいないような、ひねり出した悪意についてだ。

　悪口は普通に生活していても学校や寮でいろいろなところから聞こえてくる。話している本人同士の悪口の言い合いではなく、そこにいない第三者に対する悪口だ。そして聞こえた悪口を話す声はたいていとても楽しそうだ。僕はそれが最初に行ったひねり出した悪意だと思う。それはその人の根源的で本質的な悪意ではなく、ただ楽しい時間を過ごすためだけの、いわば暇つぶしのようにして生み出されたものだ。僕はそうやって生み出された悪意で楽しそうにやり取りをしている人たちを見ていろいろなことを考えてしまう。彼らは一人でいるときでも同じことを感じ、考えたのか。本心として彼らの中にあるものだったのか。何のためにそんなことを言うのか。そしてなぜ会話の中で話題としてあがりやすいのか。

　僕が思う話題になりやすい理由は主に四つある。一つは、話している人たちに直接関係のない第三者についての悪口なので、気を使う必要がなく、何を言っても大丈夫という安心感のようなものがあるからだ。二つ目は、話している人がお互いに心の中に引いている越えてほしくない一線を越えることなく会話を進められるからだ。三つ目は、悪口で自分よりも下の存在を作ることで、誰かの上という位置づけができ、努力せずに地位を手に入れられるからだ。四つ目は、ひねり出した悪意をつくり、それをエンタメとして消費することで楽しい時間を作れるからだ。

　僕はそんな風にひねり出され、消費され、忘れられていく悪意がなくなってほしいと思う。それは本質的な悪意とは違ってその人らしさというものがないからだ。ひねり出した悪意には込められた想いや中身はなく、その人がいままで築いてきたものでもないので、その人の人間性も何もわからない。それにひねり出した悪意はだれかを傷つけることはできるのに新しく生み出すものが何一つないというのもなくなってほしい理由だ。

　もしもひねり出した悪意がなくならず、消費を続けていった時は、人はみんな本音で話すのが怖くなり本音で話せなくなるのではないかと思う。そうなってしまったら、みんながうわべだけの付き合いをして、人生そのものが味気なくなってしまうと思う。

　だから僕はそうならないために、誰かとの楽しい時間のためだけに他の何かを傷つけるような悪意をひねり出すことだけはしたくないと思う。ひねり出した悪意は話す相手がいないと生み出されない。なぜならひねり出した悪意は話し相手のために生み出されるからだ。つまりひねり出した悪意は一人の時には考えないし感じもしないのだと思う。だから僕は誰かのために悪意をひねり出して誰かを傷つけないようにしたい。